

KYOKY

122

特集 附属特別支援教育臨床実践センターの紹介



京都教育大学

<表紙>

附属桃山小学校 2年 岡本和貴

こんな電車があったらいいな！
空飛ぶ3階建ての電車。どこへでもひとつ飛び！
たくさんのお客さんを乗せて行きたいところへ
すぐいけるよ！
駅長賞をもらった作品です。



CONTENTS



<表紙> 附属桃山小学校 2年 岡本和貴

特集

- 2 附属特別支援教育臨床実践センターの紹介
附属特別支援教育臨床実践センター長
藤岡 秀樹

海外見聞録

- 6 サワディーカー ほほえみのタイランド
大学院連合教職実践研究科准教授
佐々木 真理

留学生の声

- 8 留学の成果
交換留学生
TSCHACHE Alexander
チャッハ アレクサンダー (ドイツ出身)

研究余滴

- 9 物を見る視点、の育ちと、理科教育
理学科教授
広木 正紀

京教今昔物語

- 12 木活字のふるさと
学長
寺田 光世

京教学内探訪

- 14 5、6年生が中学校域で学習生活を
附属京都小学校副校長
多田 光利

附属学校園だより

- 16 中国・湖南省の高校生が訪れましたー
国際交流の取り組みー
附属高等学校副校長
斉藤 正治

附属学校園だより

- 17 高等部 沖縄修学旅行
附属特別支援学校副校長
春原 克彦

新任の先生から

- 18 教育学科准教授 小松 貴弘
発達障害学科教授 郷間 英世
英文学科講師 奥村 真紀
音楽科准教授 小笠原 真也
- 19 音楽科准教授 斉藤 百合子
大学院連合教職実践研究科教授 角田 豊
大学院連合教職実践研究科教授 宮野 純次
大学院連合教職実践研究科教授 石村 卓也
- 20 大学院連合教職実践研究科教授 片山 紀子
大学院連合教職実践研究科教授 小島 弘道
大学院連合教職実践研究科准教授 和泉 真澄
大学院連合教職実践研究科准教授 森田 真樹
- 21 大学院連合教職実践研究科准教授 池上 祐司
大学院連合教職実践研究科准教授 山本 雅哉
大学院連合教職実践研究科准教授 阪梨 學
大学院連合教職実践研究科准教授 藤村 法子
- 22 大学院連合教職実践研究科講師 甲斐 謙介
大学院連合教職実践研究科講師 安藤 昇
大学院連合教職実践研究科講師 澤田 清人

卒業生の声

- 23 言葉と誠実に向き合うこと
京都府教育庁指導部学校教育課指導主事
辻村 敬三
- 23 『出会い』をたいせつにして
京都市立二の丸北小学校教諭
川合 美香

ようこそ大先輩

- 24 一教師としての歩み
元同窓会理事長
小谷 利夫

読者の皆さまへ・編集後記

- 25 地域連携・広報委員会委員長
武蔵野 實

附属特別支援教育臨床実践センターの紹介

附属特別支援教育臨床実践センター長 藤岡 秀樹

1. はじめに

2007年はこれまでの特殊教育から特別支援教育へ転換された「特別支援教育元年」とも呼べる年でした。この記念すべき2007年4月に京都教育大学の附属施設として特別支援教育臨床実践センターが新設されました。

従来の日本の特殊教育では対象とされていなかったLD、ADHD、高機能自閉症などの「知的遅れ」のない発達障がい児（文部科学省の調査では対象者は6.3%）も、特別支援教育の対象に含まれるようになりました。これまでの特殊教育では、障がい種別による教育であったのに対して、特別支援教育においては障がいのある子ども一人ひとりの「教育的ニーズ」に応じた教育が進められるようになりました。障がいの有無や個々の違いを認識しつつ、様々な人々が活躍できる共生社会を創り出すことが特別支援教育には強く求められています。

本稿では、本学の附属特別支援教育臨床実践センターの概要について紹介させていただきます。



2. 設立に至るまでの経過

前事務局長の菊川治氏から発達障害学科に特別支援教育に関するセンター（附属施設）新設の働きかけがあり、発達障害学科の先生方でセンター設立のねらいや基本方針などを含めた概算要求書を作って頂きました。2006年6月12日に、発達障害学科の田中道治教授と菊川事務局長、中島会計課主査らが文部科学省に出向き、概算要求書の内容説明を担当官に対して行いました。これまで発達障害学科が行ってきた教育・研究活動や発達相談を新センターにおいて拡充・発展させることや教育実践総合センターなどの他の附属施設との差別化を図り、2007年度から実施される特別支援教育の展開に資する施設になることなどが、ヒアリングの場で強調されました。

概算要求書の内容が評価され、2007年にセンター設置が認められ、センター専任教員の1名配置されることになりました。センター設置が内定された後も、発達障害学科の教員だけでなく、教育学科（教育心理学・発達心理学分野）、附属教育実践総合センター（臨床心理学分野）、附属特別支援学校の教員を含めた設立準備委員会が、センターの事業内容、教育・研究活動の在り方などをめぐって数次にわたって議論を行ってきました。2007年7月に筆者がセンター長として選出され、専任教員の公募を行うことが決まりました。公募は2007年の夏休みに行き、数次にわたる選考委員会の選考結果、専任教員として相澤雅文准教授の採用が決定し、2008年1月1日付で本学に着任されました。

3. 特別支援教育臨床実践センターの事業内容

近畿の教員養成系大学・学部で特別支援教育に関するセンターが設置されているのは兵庫教育大学（特別支援教育教員養成プログラム開発センター）、奈良教育大学（特別支援教育研究センター）と本学の特別支援教育臨床実践センターの3大学です。各大学のセンターはそれぞれ特色を持っていますが、本学のセンターの特色について、事業内容を中心に紹介したいと思います。

本センターは、京都府教育委員会・京都市教育委員会や医療機関、福祉機関などと連携を行い、特別支援学校の教員を目指す学生・院生の教育、京都府内の特別支援学校（養護学校・総合支援学校）や特別支援学

級担任、特別支援教育コーディネーターの研修やスキルアップの支援、障がいのある子どもや保護者を対象とした発達相談などを行います。

(1) 学生教育・学生支援

特別支援学校の教員を目指す学生・大学院生への教育を発達障害学科と連携して行います。障がい特性に応じた指導ができるような実践的教育プログラムを開発します。

学内諸機関（保健管理センター・心理教育相談室）と連携を進め、障がいのある学生への支援の方策を立てます。

(2) 現職教員に対する研修

京都府教育委員会・京都市教育委員会と連携しながら、現職教員の研修ニーズに応える研修プログラムを開発し、実施します。現職教員の力量形成やスキルアップになるような講座の設定や事例検討会を開催します。また、教育職員免許法認定講習の在り方について授与権者の京都府教育委員会と協議を進め、改善を進めます。

センター設置後、現職教員向けの研修会『学校ぐるみで進める特別支援教育』外儀やよひ先生（徳島県穴喰小学校校長・前徳島県教育委員会特別支援教育課統括指導主事）、『発達障がい者の就労を考える』梅永雄二先生（宇都宮大学教育学部教授）を2回開催し、多くの教育関係者が参加されました。今後も、現場のニーズが大きい内容の研修会を企画していきます。

(3) 発達相談

発達障害学科がこれまで行ってきた発達相談を本センターが継承し、より充実したものになるようにします。特別支援教育臨床実践センター専任教員、発達障害学科教員、教育学科（教育心理学分野・発達心理学分野）教員による専門性を活かした発達相談を行います。相談に関わる教員は、臨床発達心理士・学校心理士・医師の資格保持者がおり、それぞれの専門性を活かし、チーム援助も行います。

相談内容は、発達に関する相談（言語・運動・手遊び・身体の成長など）、行動・性格に関する相談（固執・不安・多動・神経質・自傷・他害など）、養育・保育・教育に関する相談（生活リズム・集団行動・学習困難・家庭問題など）、医療に関する相談（発育・食事・排泄などの医療相談一般）です。教育・福祉関係者へのコンサルテーションも行っています。相談は予約制で電話受付（月曜日～金曜日 10～15時 電話番号075-644-8354）を行います。相談料は当面の間無料とします。

必要に応じてWISC-Ⅲ、K-ABC、K式発達検

査、DN-CASなどの知能検査・発達検査・認知能力検査も実施し、心理教育的アセスメントを行います。また、心理療法などが必要なケースでは、心理教育相談室へのリファーを行います。SST（ソーシャルスキル・トレーニング）についても日時を設定し、学生・大学院生の協力・補助を得て実施しています。発達相談を通して、臨床指導における学生・大学院生・特別支援教育専攻科生の専門的技術の向上を図ります。

(4) 京都教育大学附属学校園への支援

本センター関係教員で巡回チームを作り、本学の附属学校園に在籍する子どもに対する相談や支援を行い、併せて附属学校園教員の個別相談を行います。また、附属学校園の特別支援教育コーディネーター研修も実施します。

(5) 障がいのある児童・生徒への指導方法や教材開発

特別支援学校で学んでいる児童・生徒のみならず、通常学級で学んでいる障がいのある児童・生徒への指導方法や教材の開発を行い、教育評価の技法の改善と検証を図ります。また、個別の指導計画作成への助言や援助を行います。



センター内 相談室

4. 「特別支援教育GP」の採択と実施

2007年度に文部科学省から本学が申請していましたが採択されました。申請テーマは『KYOの特別支援教育トライアングルプラン—附属特別支援教育臨床実践センター・教育委員会・学校による教員養成』です。概要については、既に私が『LD & ADHD』2008年7月号（明治図書）に寄稿しましたが、その一部を再掲させていただきます。

本プログラムは、①若手リーダー教員養成プログラムと②スペシャリスト教員養成プログラムから成り立っており、実践に際しての中核的な位置を占めるのが本センターです。前者は、特別支援学校教員を目指す学生に対する実践的な教員養成プログラムであり、

「スタディサポーター」として学生を位置づけ、学校現場で実践を行います。①カウンセリングマインドやコミュニケーション技能の向上、②児童・生徒のアセスメントを進め、それに基づいた指導計画作成能力の向上、③通常学級における障がいのある児童・生徒に配慮した授業技能の向上—の3つの技能に焦点を当てています。

後者は、現職教員の教職キャリアに応じて専門性を高めるもので、①特別支援教育士（S.E.N.S.）を目指す教員対象の大学院授業科目の開設、②臨床発達心理士・学校心理士の資格申請に必要な大学院授業科目の開設、③特別支援教育学校教員免許状取得のための認定講習の開催—の3つから成り立っています。2008年度前期に現職教員対象向けの大学院の授業（『特別支援教育実践演習』『特別支援教育事例研究』）を土曜日に開講し、その授業の一部を特別支援教育士の資格取得のための必要ポイントに振り替える手続を行いました。

ここで特別支援教育に関連の深い資格について触れておきましょう。臨床発達心理士は、日本発達心理学会・日本教育心理学会・日本感情心理学会・日本パーソナリティ心理学会による学会連合資格で、発達心理学の視点から乳児から老人までを支援するための資格です。学校心理士は、日本教育心理学会・日本発達心理学会・日本特殊教育学会・日本LD学会・日本発達障害学会・日本学校心理学会・日本学校カウンセリング学会・日本生徒指導学会・日本応用教育心理学会による学会連合資格で、学校現場における教育相談・生徒指導・進路指導・学習指導・特別支援教育に携わる教員やカウンセラーを対象とした資格です。既に、臨床発達心理士と学校心理士は、大学院学校教育専修「教育・発達心理学コース」を中心に、隣接領域の臨床心理学や障害児教育分野の協力を得て授業を開講し、これまでも両資格の取得者を輩出しています。

特別支援教育士は、日本LD学会・日本教育心理学会・日本学校教育相談学会・日本学校心理学会・日本カウンセリング学会が連携学会となり、特別支援教育士認定協会が認定を行うもので、LD・ADHD等のアセスメントと指導の専門資格です。各学校の特別支援学級担任や特別支援教育コーディネーターにとっては、このような資格を取得しておくことが期待されます。また、指導主事や校長にとっても、特別支援教育を推進するために必要な資格であると言えます。

特別支援教育士資格保持者を中核に据え、学校心理士や臨床発達心理士が側面からサポートするのが理想だと思います。発達障がい児は、二次障がいとして不登校になったり、いじめを受けたりすることもあるの

で、カウンセリングが必要な場合があります。学校心理士はカウンセリングや学習指導が得意ですし、臨床発達心理士は発達診断や子育て支援が得意ですので、三者のコラボレーションによって各資格の長所が活かされ、特別支援教育の一層の推進が期待できることと思います。この間、本センターが開催した研修会のアンケートでも、特別支援教育士や学校心理士の資格を取りたいという先生が多いことが分かり、開講科目の内容のバージョンアップを考えているところです。また、本センターが実施した研修会では、これまで特別支援教育士や学校心理士の資格更新のための研修ポイントが付与されています。



観察室

5. おわりに

附属特別支援教育臨床実践センターのスタッフは、専任教員1名、センター長（併任）1名、事務補佐員2名と小規模ですが、発達障害学科の協力を得て事業を推進していきたいと考えています。教員養成系大学としての豊富な人的資源を活用し、教材開発やカリキュラム研究なども進めたいと思います。

私が研究・実践をしている学校心理学では、「みんなが資源、みんなで支援」という合い言葉があります。この考え方は特別支援教育にも該当するものです。障がいのある子どもに対して、学級担任、特別支援教育コーディネーター、養護教諭、教育相談担当、管理職、スクールカウンセラーなどがチームを組んで支援にあたります。知能・学力・性格などの子どもの持つ心理特性を自助資源として活かしながら、個別の指導計画を作成することが必要です。個別の指導計画を作成するためには、子どもをよく「見取る」ことが大切です。「見取り」を通して、教師の子ども理解が深まり、このことが障がいのある子どもだけではなく、障がいのない子どもの指導改善や学力向上に結びつく成果が挙げられています。

障がいのある子ども（もう少し広い範囲で捉えると

「特別な教育的ニーズ」を必要とする子ども) に対して学力保障と成長保障が強く求められています。発達障がいのある子どもの進路保障も大きな課題となっています。これまで十分に研究されてこなかった高等学校における特別支援教育も、文部科学省が2007年度から「高等学校における発達障害支援モデル事業」をスタートさせました(樋口, 2008)。京都では府立朱雀高校が指定されています。この事業においても大学・教育センターとの連携が謳われています。このような諸課題に対して、本センターが積極的に取り組みたいと考えています。関係各位のご協力を賜りますようお願い申し上げます。



プレイグラウンド

【参考文献】

- 藤岡秀樹 2008 Essay 教員のキャリアアップと資格の取得 LD & ADHD, 26, p.1. 明治図書
- 樋口一宗 2008 高等学校における発達障害支援モデル事業及び研究開発学校 月刊生徒指導 38(11), pp.6-9. 学事出版

サワッディカー ほほえみのタイランド

大学院連合教職実践研究科准教授 佐々木 真理

パスポートのタイ入国スタンプを数えてみました。この10年間で、タイへ行ったのが50回を越えてしまいました。

本学を含む、関西6教員養成系大学・学部（略：関西6大学、大阪教育大・京都教育大・滋賀大（教）・兵庫教育大・奈良教育大・和歌山大（教））とタイ・ラチャパット地域総合大学（略：RU大学）40キャンパスとの包括的な学術交流協定の締結から10年を越えました。

また、その後の本学とチュラロンコン大学教育学部との学術交流協定の締結を経て、タイと日本の大学間の交流は、タイからの国費留学生・長期・短期交換留学生の受け入れに加えて、最近は私費留学生も現れ、また、タイの大学教員グループの大学視察・技術研修やRU大学附属中学校生徒の大学・附属京都中学校訪問などがタイ側の大学や参加者の自費で行われるようになり、タイ国の国力・経済力の興隆には驚かされています。

一方、本学を含む関西6大学からタイの大学へは、教員の研究交流訪問、長期・短期交換留学生の派遣などが行われ、「タイ好き」学生も増加して、本学ではタイ・サークルも不定期ながら開かれています。

なにぶん、学外・国外での活動が多いため、なかなか見えてこない部分があると思いますが、長年にわたり培ってきたタイの大学との学術交流活動の、層の厚さと多様さは、他の大学の国際交流活動に負けないものであると自負しています。

ここでは、タイの大学と本学を含む関西6大学との交流の歴史や現在の交流状況について、私・「タイ好き」教員が、タイの魅力たっぷりに紹介させていただきます。

教員の研究交流・訪問・派遣

- ・タイの大学教員グループの大学訪問：桜のシーズン4月をピークにチュラロンコン大学やRU大学ほか、毎年10校程度のタイの大学から大学教員グループの大学視察・訪問があります。学長室の飾り棚はタイからの記念品でいっぱいになりました。最近は、京都・奈良・大阪観光が主目的の短時間・ひやかしの大学訪問は遠慮してもらっています。
- ・タイの大学教員グループの技術研修の受け入れ：今年から大学教員グループの技術研修の受け入れを開始しました。10日間から1ヶ月間の日程で、教育方法・教育技術の研修を目的とした教員グループ

を、RU大学2キャンパスから2件受け入れました。

- ・タイ留学生の同窓会：関西6大学の留学生OB/OGとの継続したネットワーク作りを目指して、10周年目から毎年、バンコクで同窓会を開催しています。関西6大学の留学生OB/OGも、最近はRU大学をはじめ現地の大学や日系企業で要職に就いたり、会社を起業したりして、多方面で活躍しています。今年は、関西6大学のプロジェクトの派遣による日本語ボランティア教師や日本からの関西6大学の関係者を含めて、タイ全土から80名ほどの参加がありました。
- ・日本語ボランティア講師の派遣：10年ほど継続して行われている個別プロジェクトを継承した関西6大学の日本語ボランティア講師派遣プロジェクトによって、講師派遣希望者を募集し、毎年5名～10名の日本語講師が1ヶ月のチェンマイでのタイ語研修の後、日本語教育の大学講師として、見渡してみると、日本語ボランティア講師の任期を終えて日本に帰国し附属学校で国際教育の教鞭をとっている教員、RU大学の交換留学生として本学で学び、帰国後RU大学日本語学科の教員になり、再び留学生として来日して本学大学院を修了してRU大学で日本語教育の仕事に就いているタイ人教員、タイ短期留学から帰った途端に教員採用試験をやめてタイへ日本語を教えに行くことを即決した日本語ボランティア講師、RU大学の日本語教育に長年に渡り大きく貢献しています。RU大学各キャンパスからは、毎年20名以上の派遣希望が寄せられており、これらの日本語講師の需要に供給が追いつかない現状です。

大学生・大学院生・タイ教員の留学交流

- ・短期交換留学研修：2006年から、毎年8月に19日間の日程で、関西6大学の日本人学生15名～20名が自費参加でRU大学4キャンパスへ、タイ語の研修と国際教育実習の体験に担当教員の引率で参加しています。京都教育大学では、これを国際理解教育パッケージの科目「国際教育実習体験」（集中講義・2単位）として実施しています。今年は、山岳民族の村でのホームステイもプログラムに組み込んで、タイの生活・文化をタイ感できる研修にアレンジしています。
- また、同じく毎年10月に14日間の日程で、RU大学4キャンパスの日本語学科学生8名が、タイか

ら大学・自費参加で関西6大学（基幹校：京都教育大学）へ日本語・日本文化研修に来日します。

この2つの短期留学研修は交換留学という形でセットになっていて、両国の学生は互いに受け入れのお世話をし合いながら相互に交流・友好を深めていきます。このプログラムに参加した学生の中から毎年1～2名、長期留学（半年～1年）や日本語ボランティア講師を希望する「タイ好き」・「日本好き」学生が出てくるのも取り組みの成果でしょう。

・長期留学（国費留学・交換留学協定留学・私費留学）：留学生30万人計画が我が国の政策として出されたにもかかわらず、大使館推薦や学生支援機構JASSOの奨学金による国費留学生は5年前をピークに減少傾向にあります。厳しい選考を経て毎年5名ほどのタイ人留学生が、日本語・日本文化研究生、特別聴講生、大学院生、教員研修留学生など種々のカテゴリーで関西6大学へ1年～2年間留学しています。また最近、タイRU大学からは自力で留学する私費留学生も現れています。

一方、関西6大学からの日本人学生のタイの大学への留学は、チュラロンコン大学教育学部や同大学院、RU大学各キャンパスへ、毎年3～5名が学生支援機構JASSOや大学独自の奨学支援金、自費などで留学しています。

・タイ視察研修：京都教育大学をはじめ関西6大学では、各大学で大学院生や大学教員が、1週間～10日間の日程でRU大学・附属学校園や現地の学校・教育機関・研究機関を中心に視察研修を実施しています。

・附属京都中学校とタイRU大学附属中学校との交流：京都教育大学附属京都中学校とタイRU大学プラナコンシアユタヤ校附属中学校との生徒・教員の交流は10年以上も続いていて、毎年、20名程度の生徒が交換留学研修を行っています。タイ文化・日本文化の研修が中心ですが、中学生の頃にこの交流に参加して来日した生徒が日本語を継続して学習し、RU大学の学生になってから関西6大学に留学することもありました。

現地駐在員・事務所の設置

京都教育大学が主幹校となり、関西6大学の加盟5大学から賛助金を得て、タイ現地バンコクのRU大学スアンスナンタ校の1室にファックスとPCを置いて駐在員事務所を開設しています。日本人駐在員・日高幸子（旧姓：小山）さんは京都教育大学OGで、現地日本人と結婚してタイで長年生活しています。RU大学チェンマイ校での日本語講師や現地法人勤務の経験からタイ事情に精通しタイ語の読み書きができるので、この駐在員を媒介にして関西6大学からは日本語

でタイの大学とやりとりができるようになりました。また、日本人留学生・日本語ボランティア講師のタイへ派遣の際の日本大使館・タイ入国管理局の事務手続、タイ語研修や各RU大学への派遣事務・輸送・身分保障、また、関西6大学からのタイ研修訪問や短期交換留学の際の計画から宿泊・食事・車のアレンジ・案内・引率まで引き受けてもらってます。現地駐在員を置いたおかげでこれまでたびたび起こっていたタイの大学とのコミュニケーションの齟齬や空港送迎などでのミスがなくなり、はじめてのタイ渡航でも、1人でも安心してタイへ行くことができるようになりました。日高幸子 sachikoyama@mail.goo.ne.jp

激辛い料理も酷暑さも決して半端ではないのですが、タイの魅力のひとつでいえば、やはり私たちをほほえみで迎えてくれるフレンドリーな雰囲気ではないでしょうか。いつもニコニコ到着を待っていてくれる人がたくさんいる国、タイ国。

この10年間あまりのタイの大学との交流で、なん100人という数の日本人・タイ人の関西6大学の関係者が両国を渡り合ったこととなります。

主に日本語主専攻のあるRU大学各キャンパスに契約教員として任用されて赴任していきます。日本語ボランティア講師の任期は原則1年ですが、その後契約を更改・延長して、コントラクト（給与は教育省負担）として長期間タイで働いている講師もいて、日本語ボランティア講師をきっかけにタイに居留して日本料理店チェーンを展開している起業家など、タイや日本との出会いがきっかけとなって、その後の進路や人生の舵取りを大きく切り変えた（狂わせた？かも）という事例は、私の場合も含めて枚挙をいとわないほどあります。

これは、タイの大学との長年の交流の功罪なのか、または大いなる成果なのかは、それぞれ本人の評価次第なのですが、この長年の交流が、両国の大学生や附属中学校生徒の人生や進路の選択に、少なからず影響を与えるものであったことは否めない事実です。

先人が築いたタイの大学とのすばらしい絆を固く守りつつ、さらに発展させていくのが私どものつとめであると感じています。



留学の成果

交換留学生 TSCHACHE Alexander
チャッハ アレクサンダー(ドイツ出身)

京都教育大学に来てからもう一年ぐらい経ちました。全然そんな気がしません。

どうもはじめまして、ドイツのErlangen大学から留学に来たアレクサンダー・チャッハです。日本ではこれだけでは正式な自己紹介になりませんので、改めてドイツ、Bamberg市Clavius-Gymnasium高校出身、Erlangen-Nürnberg大学純粋数学主専攻ディプロマ課程日本学科副専攻3回、京都教育大学特別聴講学生、アレクサンダー・チャッハです。よろしくおねがいします。

留学の印象についてのこの文章を頼まれましたが、いったい何を書けばいいでしょう。確かに経験豊かな一年間でしたが、どこから語ればいいでしょう。

いきなりですが、部活からいきます。

印象として、弓道部の人たちと一緒に過ごした時間は一番記憶に残るでしょう。日本の文化を研究しようと思ったわたしには、日本社会の縮小である部活の日常が最高の体験でした。日本の特徴である厳しい上下関係そしてその中に成立する人間関係がどういうものがドイツでの勉強で分かったつもりでしたが、やはり自分で体験した上で、想像したものとはかなり違うということも気づきました。そして、日本に来たばかりのわたしをやさしく受け入れてくれた弓道部のみなさんに深く感謝しています。頑固なわたしがいつもたいへんお世話になりました。

自分が日本に向いているかどうかや将来日本で就職するかどうかなどで迷っている留学生に部活というものの体験を勧めなくはいられません。

ちなみに、わたしには無理だということをよく理解しました。それがなぜかと聞かれると理由はまた山ほどありますが、主に次の一つです。

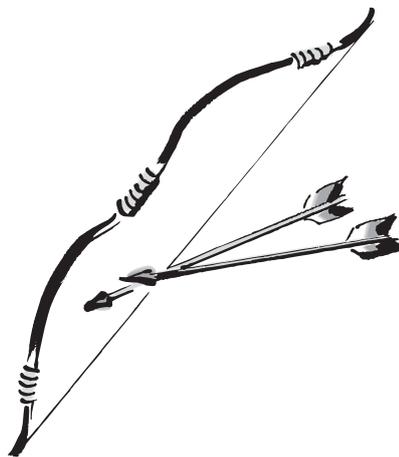
日本人は外国人に対してやさしいということです。

普通はそれがありがたいことで、わたしも何度も困っていたときにそのやさしさに頼りました。しかし、どれほど日本で生活できるようになっても、どれほど日本語が上手になっても、どれほど習慣に慣れてきて礼儀正しくなっても、その様々なかたちで見えて



くる「外国人に対してのやさしさ」は決してなくなりません。よって、気遣われていると解っていても解っているからこそ、わたしのなかの「ここはわたしの居場所ではない」という気持ちもなくなり得ませんでした。でもそれもまたそれでいいと思っていて、悲しくてがっかりしたりしているわけでもありません。いけるかだめかをはっきりすることも最初からわたしの留学の目標のひとつでしたから。その機会をあたえていただいたこと、そして日本に来てから支えてくれたみなさんにも言葉に言い表せないほど感謝しています。おかげさまで日本での一年間は正に一生のかけがえのない経験になりました。

以上、京教の唯一の長期欧米留学生からの短い報告でした。



「物を見る視点、の育ちと、理科教育

理学科教授 広木正紀

生態学がバックグラウンドの筆者が、本学への赴任以来、理科カリキュラムの検討や、理科教材の開発を研究テーマとして30年になる。

一頃は「理科は難しくて分からない」、やがて「理科はつまらない」、ついに最近では「理科はくだらない」といった言葉に現れる、理科に対する生徒の気持ちが気がかりだと、ある高校の教師が言っているのを聞いたことがあるが、PISA (Programme for International Student Assessment) (2006) など国際学力調査の結果から指摘されている、日本の子ども達の理科への関心の低下 (いわゆる理科離れ) とも符合しているようで、印象に残っている。

誰にでも経験があると思うが、面白さも意義も感じられない“学び”を強いられることほど苦痛で、時間と労力の無駄な使い方はないであろう。

筆者の研究動機も、自分も経験した“面白さも意義も感じられない学び”の場を、“生きた学び”の場にして行くことに、少しでもあれ寄与できないかということであった。

こういう課題に取り組む上で、よく出て来るのは、“身近なもの”というキーワードである。学びにおいて、誰もが関心を持ちやすいというのがその理由であろう。筆者も自分なりのやり方で、“身近なもの”にこだわって来た。

1. 「生活の中で目にふれる身近な物」の扱い

理科教育においても、“生きた学び”が成立するための前提として、学習対象に対する学習者の関心が必要である。実際、教育の場において「生活の中で目にふれる身近な事物」を扱うことの有効性はよく言われる。そのとおりだと思う。

しかし問題は、「生活の中で目にふれる、身近な事物」を扱いさえすればよいのかということである。「身近な事物をどういう視点から学ぶか」が重要なのではないだろうか。

飢餓で苦しむ多くの民が存在する同じ地球上の日本の中で、飽食や食べ残しの問題が、以前から今に至るまでずっと指摘されている。例えば、そのような子ども達の意識の一端がうかがわれる記事が、1985年9月26日付けの朝日新聞にも、『牛乳爆弾』という見出しで載っており、「ストローを挿した牛乳パックを押し縮めて牛乳を発射させる「牛乳鉄砲」や、牛乳パッ

クごと校舎から投げ落とす「牛乳爆弾」の遊びが、給食の食べ残しと関連させて紹介されている。

紹介されている子どもたちの行動は、圧力や位置エネルギーという科学概念を、身近な食べ物とかかわらせており、「生活と密着した理科の実践」とも見れる。しかし、別の観点からすると、命ある物に由来する食物をこのように扱う子ども達の行動は見過ごせない問題を孕んでいる。現代も、程度の差はあれ、子ども達のこのような意識の問題が抜本的に解決されている状況ではないと考える。

このような行動は、単にしつけの問題として済まされることなのだろうか？ 背景に、子ども達が「物」をどういう視点からとらえているか、理解しているか、という理科のあり方に関わる問題が存在していると筆者には思われる。

2. “物の正体”を探る視点

「ガラスの正体を探るとき、あなたなら、ガラスについての何を調べますか」

これは、筆者が本学大学生に対するアンケートの中で毎年設けている質問である。

この質問 (複数回答可) に対する回答として、例年すべての人が挙げるのは、「化学構造」「強度」「光や熱に対する性質」「化学薬品に対する性質」…など、ガラスの構造や性質に関するもので、「原料」「製造工程」など、ガラスの由来や来歴に関するものを挙げる人は、ごく少数 (数%) である。

化学構造 強度 光や熱に対する性質 化学薬品に対する性質	} 構造や性質に関すること (大部分の人が挙げる)
原料 製造工程	

アンケートの回答は次のことを物語っている。

① 「物の正体」を知るとは、その物のどういうことを知ることなのか」についてのとらえ方には2つの視点 - 構造や性質を探る視点と、由来や来歴を探る視点 - があること

② 多くの人は、「構造や性質を探る視点」だけが、その物の“正体”を知る視点である、ととらえていること

3. それぞれの視点からの知識は、どういうことに役立つか

物の構造や性質を知っていることは、その物を有効に使うことに役立つ。すなわち、構造や性質を探る視点（視点Aと呼ぶ）は、使用の視点とも言える。ただしこの視点は、物が存在することを当然のこととしている。

一方、物の由来や来歴を知っていることは、その物入手することに役立つ。すなわち、由来や来歴を探る視点（視点Bと呼ぶ）は、入手の視点とも言える。

視点Aは資源、特に資源の有限性という見方が必ずしも意識されていない視点であり、視点Bは意識され得る視点であるということもできよう。また、視点A（構造や性質を探る視点）は、人が「その物」を、観察や実験を行う場に持って来て、そこにとどまって調べ得る視点だが、視点B（由来や来歴を探る視点）は、人が一箇所にとどまらずに動き回らねば調べられない視点でもある（表1）。

表1. 生活の中で目にふれる身近な物の“正体”を探る2つの視点

	構造や性質を探る視点 (視点A)	由来や来歴を探る視点 (視点B)
各視点からの情報の例	化学組成・構造 強度 光や熱に対する性質 化学薬品に対する性質 …など	原料 製造工程 …など
人間のどんな活動に役立つ情報か (ガラスを例に)	ガラスの 使用 に役立つ情報 (ガラスが存在していることを前提とした情報)	ガラスの 入手 に役立つ情報 (ガラスが存在していることを前提としない情報)
実物に当たって情報を得ようとするとき、調査者自身が必要かどうか	ひとつの場所（例えば実験室）で調べられる	場所を移動せねば（実験室にとどまっていたら）調べられない

4. “物の正体”を探る視点として、理科が育てて来たのは？

例年、アンケート回答者のほとんどは、視点Aだけを回答し、視点Bの回答は大変少ない（数%程度）。このことは、身近な具体物を見るときに、多くの人にとって、資源という観点が、ほとんど意識されていないことを物語っていると思われる。

表2は、「生活の中で目にふれる身近な具体物が小・中学校の理科で、どういう視点から扱われているか」を、学習指導要領で調べたものである。

学習指導要領を見る限り、自然物である「水」を除くと、理科に出てくる「身近な人工物を学ぶ視点」は、全てが視点Aになっている。視点Bからの教育、すなわち「どんな人工物も、その由来や来歴を遡って追跡すれば、必ず原料など自然（すなわち人間の意図に依存しない営み）にたどり着く」ということ自体に目を向けた教育、すなわち「物の入手法」や「資源」という観点から物を見る教育は、これまでの理科ではほとんど行われず、視点Aからの教育、すなわち「物が入手できることを当然のこととして、どのように使用するか」ということに専ら目を向けた教育が行われてきたと言えるのではないだろうか。

「ガラスの正体を探るとき、あなたなら、ガラスについての何を調べますか」という質問に対し、視点Aの回答は全員が行っている。この事実は、初等・中等教育を終えたあと、学習者に「物」についての細かい知識は残っているかどうか分からないとしても、物をとらえるときの視点はしっかり身につけていると言え

表2. 小・中学校学習指導要領の「理科の内容」の中でとりあげられている身近な「物」と「それを学習する視点」。○…その視点でとりあげられている、×…その視点でとりあげられていない

告示年 視点	1977(昭和52)		1989(平成元)		1998(平成10)		2008(平成20)	
	A	B	A	B	A	B	A	B
	性質や構造を探る視点	由来や来歴を探る視点	性質や構造を探る視点	由来や来歴を探る視点	性質や構造を探る視点	由来や来歴を探る視点	性質や構造を探る視点	由来や来歴を探る視点
生活用品等								
水	○	×	○	○	○	○	○	○
糸	○	×	○	×	○	×	○	×
ゴム	○	×	○	×			○	×
ガラス					○	×	○	×
虫めがね	○	×						
とつレンズ	○	×	○	×	○	×	○	×
鏡	○	×			○	×	○	×
金属	○	×	○	×	○	×	○	×
鉄	○	×	○	×	○	×	○	×
ばね	○	×	○	×				
電熱線			○	×				
プラスチック							○	×
てんびん	○	×	○	×				
乾電池	○	×	○	×	○	×	○	×
光電池			○	×	○	×	○	×
豆電球	○	×	○	×	○	×	○	×
磁石	○	×	○	×	○	×	○	×
方位磁針	○	×						
電磁石	○	×	○	×	○	×	○	×
電流計	○	×						
モーター			○	×	○	×	○	×
コンピューター			○	×				

るのではないか。見方を育てるという点で、理科教育の“成果”は確かに存在するようである。

このことが「牛乳鉄砲」などの遊びの背景にある問題だと思われる。

5. それぞれの視点における、浅い知り方と、深い知り方

視点Aからの物の知り方の場合、当座の使用法だけ知っているというマニュアル的な“浅い知り方”と、物の構造や性質を知っているという、応用のきく“深い知り方”がある。それと同様に、視点B（由来や来歴を探る視点にも、“浅い知り方”と、“深い知り方”がある（表3）。

表3. 物の“浅い知り方”と、“深い知り方”

視点 知り方	視点A (構造や性質を探る視点) (使用の視点)	視点B (由来や経歴を探る視点) (入手の視点)
浅く 知っている	当座の使用法だけ知っている (マニュアル的知り方)	当座の入手法だけ知っている (スーパーで購入できる、等)
深く 知っている	物の構造や性質を知っている	物の由来や経歴を知っている

6. 視点Bは、環境教育として育成したい視点そのもの

視点B（由来や来歴を探る視点）に、使った後どうなるかを探る視点を加え、由来や行方を探る視点（＝広義の視点B）とすると、視点B（広義）は、「物が自然から発し、人間に使われ、再び自然に還る道」、すなわち「物」をその“一生”の中でとらえる視点」あるいは「物を循環の中でとらえる、持続的入手の視点」と位置づけられる。これは、「人間（学習者）の生活と自然とのつながり」への気づきと認識、すなわち「人間（学習者）の生活が、自然の循環の中にある、という科学的概念」の形成を、「身近な物」を介して促す視点である。この視点は、環境教育が育てようとしている視点そのものである。

環境教育※における、環境問題や自然保護に対する意識の醸成は、一般的・抽象的概念の理解を強いるだけでは不可能だと考える¹⁾。大切なのは、まず、自分の生活に密接に関わる具体的な事物への、視点B（物の由来や行方を探る視点）からの見方や意識を育てていくことではないだろうか。

※ 環境教育は「自分（学習者）が環境（社会環境・自然環境）とつながっていること、さらに、どうつながっているか、についての理解と、そのつながり方を踏まえた生き方の工夫」についての教育である²⁾。

7. 物の由来や行方を探る視点からの実践例

視点Bに立脚し、「自然 → 人間の生活 → 自然」

という、“身近な具体物の一生”を迎える直接体験活動を通して「学習者自身の生活と自然とのつながり」への気づきや理解を促す授業（教材）をつくっていくことは、環境教育の視点を踏まえたこれからの理科教育の大切な課題であると思う。いきなり理科授業の中での実践は難しいとしても、総合的な学習の時間などの有効な活用が望まれる（表4）。

表4. それぞれの視点からの直接体験活動の例

	視点A (構造や性質を探る視点)	視点B (広義) (由来や行方(物の一生)を探る視点)	
	使用の視点	入手の視点 自然から生活への道筋を探る視点 (狭義の視点B)	生活から自然への道筋を探る視点 (持続的入手の視点)
活動	物の構造や性質を調べる観察や実験	自然からの物作り	物の放置観察
豆腐	豆腐の化学成分を調べる実験	大豆の栽培から出荷した豆腐づくり	室内に放置された豆腐の変化の観察
陶器	陶器の強度を調べる実験	粘土の採取から出荷した陶器づくり	雨ざらし状態での陶器の変化の観察
綿布	綿布の酸やアルカリに対する性質を調べる実験	ワタの栽培から出荷した綿布づくり	土壌中に埋められた綿布の変化の観察
紙	紙の構造を調べる顕微鏡観察	植物からの紙づくり 製紙工程の見学	雨ざらし状態での紙の変化の観察
釘	電氣的・磁氣的性質を調べる実験	砂鉄の採集から出荷した鉄づくり	雨ざらし状態での釘の変化の観察

なお、本稿は、拙著²⁾を中心にした論考をもとにしている。

文献

- 1) 広木正紀（1997）環境教育の課題と教員養成大学の役割 - 三段階の目標から成る、環境教育の枠組みの提案. 京都教育大学環境教育研究年報 5: 41-51.
- 2) 広木正紀（2002）理科から環境へ広がる学び - 総合的な学習の時間と環境教育. [変わる理科教育の基礎と展望（理科教育研究会）、東洋館出版社]、pp.78-89.

木活字のふるさと

学長 寺田光世

京都教育大学が位置する伏見は木活字のふるさとである。伏見は、京へ三里、宇治へ二里、大津へ四里八丁、大坂京橋へ九里という交通の要所であり、城下町として栄え、江戸時代中期には六千六百戸余りの民家が集中する大都市であった。その昔、豊臣秀吉による伏見城築城以前は、伏見の町の南際まで巨椋池が広がり、池の東は六地藏まで、南は宇治橋・伊勢田まで、西は淀まで達する大きな遊水池であり、池の中には大小の島が点在していた。鴨川と桂川の水があたかも淀川水流の主流であり、木津川、宇治川、山科川の水はそれぞれ一旦広い巨椋池に入り、その後に淀川へ流れ込むという具合であったという。町の東側は小高い丘陵であり、丘陵から南の方向を眺めると美しい巨椋池を全貌することができる。丘陵と巨椋池との際は指月の濱と呼ばれ、丘陵は指月の丘、指月の森などと呼ばれて、まるで三井寺から琵琶湖を遠望する景色にも似た景勝地であったと推測される。足利将軍は春日参りを終えた帰路では宇治から乗船し指月の濱に上陸したのち小休憩をとってから行列を整えて帰ったと伝えられる。

秀吉は伏見城築城のための資材を指月の濱から荷揚げする予定であった。しかし水深が浅いために船が近寄れず、止むを得ず指月の濱の水深を深めるために宇治川の水流を北方へ大きく迂回させて指月の濱へ水流を導く人工堤をつくる策をとった。石高一万石につき

三百人の人夫を割り当て、約二十五万の人夫を伏見に集めてそれぞれ区域を分担させて工事に当たらせた。いわゆる太閤堤と呼ぶ現存の堤はその時の造営によるものである。指月は築城の重要拠点であり、名勝地として名のあるところだったが、秀吉が新しい城を伏見城と命名したことにより急に伏見という地名が人々に広く知られることとなった。

さて、秀吉の没後、徳川家康は民衆に広く教育を奨励するため足利学校校主で学僧の閑室元信（号は三要、1548～1612）を伏見に呼び寄せ、元信に寺地と寺領百石を与えるとともに学校の開設と書物出版の事業を命じた。元信はその命により指月の丘に円光寺を創建（1601）し、ここに足利学校の上方学校を開き、家康から下賜された十万個余りの木活字を用いて書物の出版を始めた。書物の出版は慶長四年～十一年（1599～1606）まで続き、この時に出版された書物は後世になって「伏見版」と呼ばれることになった。刊行書としては、「孔子家語」「六韜」「三略」「貞観政要」「周易」「七書」が知られている。指月の丘の円光寺は現存しないが、文献上から推定すると現在の伏見区桃山町立売の付近と思われる。また立売に隣接する桃山町鍋島は元信とゆかりの深い鍋島信濃守勝茂の邸跡であると思われ、円光寺の寺地選定にあたって鍋島勝茂がかかわったことも考えられるようである。



図1 江戸時代の伏見と指月の濱（加藤次郎著「伏見桃山の文化史」から引用）

地図左上に御香宮、左下に豊後橋（現、観月橋）、宇治川北岸に指月の濱があり、指月の濱の北に「立売」と「鍋島町」の地名が書き込まれている。円光寺はこの辺りにあったと思われる。

指月の丘の円光寺は、当時、漢字を教授する学校として知られていたが、その後の円光寺と木活字はどうなったのが気にかかる。円光寺は慶長八年(1603)に相国寺内に移転、その後、慶長十九年(1613)に元佶の弟子である宗僕が円光寺を相続した。しかし、元和六年(1620)の大火で円光寺が消失し、その後、寛文七年(1667)に一乗寺村に再建され、現在の臨済宗南禅寺派に属する一乗寺の瑞巖山円光寺となっている。また幸にして木活字も一部現存する。現在、一乗寺の円光寺に所蔵されており、円光寺の住職さんによれば「現存する日本最古の木活字です」とのお話であった。木活字の保存状況については、文化庁の補助を受けて京都府教育委員会が昭和63年から3ケ年に亘って大規模な調査を行い、「円光寺所蔵伏見版木活字関係歴史資料調査報告書」にまとめている。報告書によると、木活字は漢字活字と片仮名活字、および特殊な文字・記号類があり、活字の大きさや形から分類すると四種類に区別できる。樹種はほとんどサクラ属である(一部はホオノキ)。したがって、カキノキ、カリン、ツゲ、ツバキ等を使用した朝鮮活字とは明らかに異なる。活字の保存数の最も多い種類は縦横高が12.5×16.7×20.4ミリで、その個数は約23700個であり、その他の種類を加えると約52300個ほど保存されているようである。



図2 円光寺(現、一乗寺小谷町)に現存する木箱入り木活字(写真:文化財保護課発行「円光寺所蔵・伏見版関係資料について」から引用、一部カット編集)

平成17年に「文字・活字文化振興法」が制定された。制定の目的は「文字・活字が知識及び知恵の継承及び向上、豊かな人間性の涵養並びに健全な民主主義の発達に欠くことのできないものであり(中略)、文字・活字文化の振興に関する必要な事項を定めることにより(中略)、我が国における文字・活字文化の振興に関する施策の総合的な推進を図り、もって知的で心豊かな国民生活及び活力ある社会の実現に寄与する」とされる。

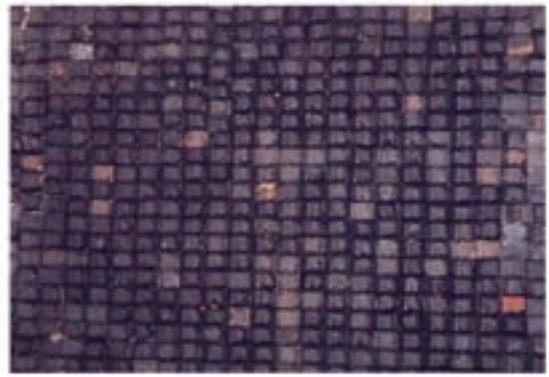


図3 円光寺木活字近影(写真:文化財保護課発行「円光寺所蔵・伏見版関係資料について」から引用、一部カット編集)

京都教育大学は木活字のふるさと伏見に位置する。今から凡そ400年前にこの地から活字文化が始まったが、活字は今やデジタル文字に替わってしまい、金属活字でさえ眼にすることはなくなった。しかし活字にせよデジタル文字にせよ、「ことば」を大切にすることは今昔を通して変わることはない。京都教育大学は木活字のふるさと大学として文字・活字文化振興に向けたメッセージを進んで世に発信するにふさわしい大学である。

5、6年生が中学校域で学習生活を

附属京都小学校副校長 多田光利

京都小・中学校では平成15年度から、『9年制義務教育学校』の設立に向けた小中一貫教育システムの確立に関する研究開発に取り組んでいることは、大学広報第120号でも紹介させていただきました。そして、平成19年度の京都中学校の耐震補強を伴う改修工事においては、これまでの小中一貫教育をより現実的なものにするための工事も大学のほうですすめていただきました。その結果、中学校北校舎2、3階には、高等部8年、9年が、中学校本館校舎には中等部5年、6年、7年が入ることが出来るようになりました。

そこで、昨年度末頃から両校の運営企画委員会で原案を作り、合同職員会議、合同研究会を経て、小中育友会、小中振興会などの承認を得、保護者説明会をもって、いよいよ6月2日（月）から5、6年生が中学校教室へ登校することとなりました。文部科学省研究開発学校指定6年目にして、ようやく表に見える成果を示すことが出来るようになったわけです。



本校にとって特別な記念日となる6月2日（月）に先だって、5月30日（金）には、小学校職員室の教員座席の入れ替えも行いました。

初めて5、6年生が中学校へ登校する6月2日の朝、中学校の玄関に立ち登校してくる5、6年生を見ると、どこかうれしそうで和やかな雰囲気になっていました。それに反して、ふだん賑やかな小学校正面玄関はひっそりとしていました。また、5、6年生の放送委員会の子も達も担っていた朝の校内放送も流れていませんので、いっそう静かで子ども達はどこにいるのかという錯覚にさへ陥るような雰囲気でした。

しかし、5、6年生が完全に中学校域へ学習生活域を移すには、まだまだ解決しなければならない事があ

ります。その中でも、大きな問題は「給食」と理科や音楽、図工等の学習で使用する「特別教室」の割り当てです。そのため、現在は時間割を見ながら5、6年生が小学校校舎と中学校校舎を行き来するという状況が生じています。実際、ある週の水曜日時間割を仮定して、5、6年生児童の一日の動きを担当の先生方とともにシミュレーションしてみました。その内容を紹介いたします。



【水曜日時間割を仮定しての

中等部5、6年生の1日の暮らし（モデル）】

- 1校時 英語 2校時 社会 3校時 理科
- 4校時 理科 5校時 国語 6校時 アントレ
- 上靴は、中学校域下足箱に入れてある。

①朝の登校

- ・8時35分までに中学校正面玄関から各教室へ登校。
- ・朝ランや遊びは小学校大運動場へ移動。警備員または担当教諭の指示に従い新町通を渡る。朝の会が始まるまでに、中学校域教室に戻る。



- ・保護者の欠席連絡は小学校へ。内線を使い、まとめ

て中等部職員室へ連絡をする。

○5、6年生が中学校域に生活根拠があるので、この時間帯の放送、飼育、園芸委員会などの常時活動は行わない。

②朝の会（8：40～8：50）

・中学校教室で健康観察、諸連絡を行う。

③1、2校時授業 英語 社会

（8：50～9：40 9：50～10：40）

・英語と社会は、中学校教室で50分授業。

④移動（10：40～10：50）

・2校時終了後、担任の指示に従い中学校域から小学校域（理科室）へ上靴と給食の用意および5、6校時の学習に必要なものを手提げ袋に入れて移動。ランリュックは中学校の自教室ロッカー内に置いておく。

・小学校域の下足箱に下靴を入れ、教室に手提げ袋を置きに行く。その後、理科室へ移動。

○5、6年生が中学校域に生活根拠があるので、この時間帯の放送、飼育、園芸委員会などの常時活動は行わない。

⑤3、4校時授業 理科

（10：50～11：40 11：50～12：20）

・小学校理科室で3校時50分、4校時30分の授業。



⑥給食（12：25～13：10）

・小学校域教室で、給食の準備、給食、後片付けを行う。

⑦昼休み（13：10～13：30）

・小学校域で休息、遊びの時間とする。特別な理由がない限り、中学校域への移動は認めない。

○5、6年生が小学校域に戻ってきているので、この時間帯の放送、飼育、園芸委員会などの常時活動は実施できる。

⑧清掃（13：30～13：45）

・小学校域割り当ての場所の清掃を行う。

⑨5、6校時授業 国語 アントレ

（13：50～14：35 14：35～15：20）

・小学校域の教室で国語、アントレの授業。45分間。

⑩移動（15：20～15：30）

・6校時終了後、すべての荷物を手提げ袋に入れ中学校教室に移動し、帰りの会を行う。場合によっては、小学校域教室で帰りの会を行った後に、中学校域に移動することもある。（中学校下足箱に上靴は必ず入れて帰る）



⑪放課後 当番清掃（15：35～15：50）

・放課後の遊びは、小学校域で行う。上靴を中学校下足箱に入れた後、小学校域に移動し遊ぶ。
・当番活動の清掃は、15：35～15：50の間に割り当ての場所を清掃する。

⑫下校

・遊ばないで帰る5、6年生は、小学校によらないで直接下校する。
・小学校域で遊ぶ5、6年生は、小学校域に移動した後、小学校正面玄関から下校する。また、定期券を必ず担任に預ける。だれが小学校域で遊んでいるかを把握することができる。



ここまですすめることが出来たのも、保護者の皆様や育友会、教育振興会、同窓会、そして大学と多くの方々の支えがあってこそと思います。改めて御礼申し上げます。

中国・湖南省の高校生が訪れました —国際交流の取り組み—

附属高等学校副校長 齊藤 正治

6月30日（月）、日中青少年友好交流事業の一環として、中国湖南省の高校生19名（2校）とその関係者4名の来訪を受けました。歓迎及び交流についてのプログラムは、つぎのとおりです。

- ①歓迎セレモニー ②校内施設見学 ③授業参加
④生徒交流会

午後の短い一時でしたが中国高校生、本校生ともに有意義な時間を過ごすことができました。内容の詳細を以下に記します。

①歓迎セレモニー：学校長挨拶、中国団長挨拶、記念品贈呈（交換）の後、映像による学校紹介。特に、文化祭関連の映像では本校生の明るくユーモラスな姿を見て、中国の生徒にもようやく笑顔が出てきて、緊張感がとれたようでした。

②校内施設見学：和室、コンピュータ室、図書室、化学教室、家庭科教室を順に案内。家庭科教室では、育友会（PTA）の文化行事「糠床講習会」が行われていて、保護者から漬物をもらった中国の生徒の感想は、「臭いはひどいけど、美味しい！」とのことでした。

③授業参加：中国の生徒が本校の英語または国語の授業に参加。英語の授業では本校生とペアを組んで展開されていく授業が行われ、また、国語の授業ではいまずぐ使える京都弁を本校生が教え、中国の高校生からは湖南省に行ったときに使える中国語をいくつか教えるという内容を含んだ授業が行われました。

④生徒交流会：日中生徒代表挨拶、部活動体験、終わりの会が行われました。今回の交流会の実行委員が企画運営した取り組みであり、特に司会進行では、司会者と通訳を生徒が務め、日本語から中国語にその場で通訳する形式で行われました。

日中生徒代表挨拶の場では、本校は生徒会執行委員長が、中国は生徒全体の代表が、ともに日頃の学習で習得した英語力を発揮して挨拶をしていました。

部活動体験では、茶道部・華道部・剣道部・SSC活動（英語でプレゼン）の4つグループに分かれ、本校生が熱心に指導を行い、また中国の生徒が熱心に活動している場面が多々見られました。特にSSC活動（英語でプレゼン）では、中国生徒の質疑のやりとり

から、その英語力のすばらしさを感じられました。

終わりの会では、生徒どうしのプレゼントの交換、記念撮影等が行われ、メールアドレスを交換する生徒や個々に写真を撮りあう生徒がいて、時間いっぱいまで名残惜しそうなようでした。

今回の訪問は準備期間も短く、また本校生の実行委員としてボランティアを募らなければならないことなど、さまざまな困難点がありましたが、結果的には中国の高校生および本校生にとってたいへん有意義な時間であり、また貴重な体験であったと感じています。そのことは、茶道部・華道部・剣道部・SSC活動の協力体制および実行委員の尽力あってのことであり、本校生の底力が印象に残りました。実行委員の感想として「せっかくの機会だから、もっと時間をかけたかった」「このような体験を今後も行いたい」等が出ていました。国際交流の機会を設けることは、生徒にとってたいへん有意義であり、生徒にも強い関心があることを再認識する機会となりました。



高等部 沖縄修学旅行

附属特別支援学校副校長 春原克彦



高等部の修学旅行は、3泊4日で沖縄に行きます。飛行機に乗るこの修学旅行は、20年ほど前から始まりました。今でこそ当たり前のようにもなっておりますが、当時は、特に養護学校としては先駆けだったと記憶しております。

毎年、5月に沖縄に行きます。深いジャングルのような森を抜けると海に出ます。沖縄の海はもう泳げました。はるばる京都から来たと言うことが実感できます。



沖縄の森



沖縄の海

昼食に沖縄そばを食べたり、沖縄料理をつくって食べます。夕食には沖縄市内の牧志第一公設市場内の食堂で、郷土料理を食べます。こうした食にかかわる学習も、京都との違いを実感させてくれます。

首里城や琉球村では、京都では見ることができない建物に出会います。中に入って、柱に触って、歩いて、間近に見て、仲間と一緒に動いて建物の立ち方や、装飾の見事さ、大きさが体感できます。



沖縄そば



ちゅら水族館



首里城



琉球村

対馬丸記念館や嘉手納基地を見て、戦争の怖さや、平和の尊さを知る基となる体験をします。実り多い高等部修学旅行です。

教育学科准教授 小松 貴弘

カウンセリングや心理療法において、相談に来た人の成長・変化を助けるためには、相談に来た人と相談を受ける人との間にどのような関係が築かれることが望ましいのでしょうか。そのような関係を築くためには、相談

を受ける人にはどのような資質や考え方、相手との接し方が必要となるのでしょうか。このような私の研究テーマは、親子関係、教師と子どもの関係のあり方の探求にもつながっています。

発達障害学科教授 郷間 英世

教育大学の前は小児科医（小児神経医）として子どもたちと関わってきました。いろいろな障害を持つ子どもや慢性の病気の子どもなど、サポートを必要としている子どもたちがたくさんいます。また、最近の健常の子どもについても、集団行動ができない・すぐに切れやすい・絵が画けないなど、その発達のアンバランスさについての研究をすすめています。今後も子どもたちの問題につ

いて、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。



英文学科講師 奥村 真紀

この春、英文学科に着任しました。専門は英文学、特に19世紀のイギリス小説を中心に、架空の物語世界を作り出す言葉の力について考えています。小説は始めから完成した存在ではなく、読者が読んで初めて意味を持っ

た存在になります。小説を読む楽しみは、字面を追うだけでなく、言葉の奥に隠された深い意味を探り、作品の中の時代精神や歴史、文化を知ることです。その魅力を伝えられたらと思っています。よろしくお願いします。

音楽科准教授 小笠原 真也

私の専門はピアノ演奏法です。ピアノ演奏を通して作品の神髄を聴衆に伝えられればと、研究を続けています。教える立場となってからは、逆に学生たちから教えられる事も多く、日々自分の認識を新たにしております。教

育学部で教鞭を執る者として、子供の感性を豊かにできる教育者、どんな子供にも正面から向き合え、子供に生きる力を与えられるような教育者の養成を心がけたいと思っています。

音楽科准教授 齊藤 百合子

現在は「音楽科教育実践学」を専門領域として、小学校の音楽科の授業づくりや子どもの表現過程について研究を進めています。これまで小学校などの教師経験の中で、子どもたちの生き生きとした感性に幾度となく出会ってきましたが、子どもが輝く音楽の授業の背景には、

必ず表現の原理に基づいた理論があります。経験知で授業をするのではなく、理論を踏まえた音楽授業のできる教員を育てることが私の希望でもあります。その過程で私も共に学び成長していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

大学院連合教職実践研究科教授 角田 豊

平成20年の4月からこちらに赴任しています。連合大学院というこれまでにない研究科ですので、私は京都産業大学の教員でもあります。私の専門は臨床心理学で、カウンセリングや心理療法を中心にした領域です。この分野は子育て、医療、教育、福祉、司法など様々な領域

に関わりを持ちますが、教職大学院では教師を目指す人や現職の教師の皆さんに役立つ、児童生徒の理解や関わりのある方を、院生の皆さんと一緒に探究していければと思っています。

大学院連合教職実践研究科教授 宮野 純次

国際比較理科教育の立場からドイツの科学教育、環境教育、自然体験学習、並びにカリキュラム構成・開発・評価に関する研究とともに、学内外において、自然体験型環境教育を実践しています。フィールドワークと事例

研究を通して、マネジメントの視点から、カリキュラム評価を学校づくりの中心におき、特色ある学校づくりや学校改善へと展開することに関心を持ち研究を進めています。

大学院連合教職実践研究科教授 石村 卓也

従来から教員養成段階において、教科指導、生徒指導等学校における教育活動を進める必要な知識・技能は、「実践と理論の結合」が必要とされたが、さらに、教職大学院の制度設計においても、「理論と実践の融合」が強く意識されたこのことは、これからの教員には、激変

する社会情勢の中で、絶えず教育実践を通じて自ら教育理論を研究・開発し、互いにその理論を学ぶとともに、協働して教育課題に取り組む実践指導力を備えることが強く求められているといえるのでないか。こうした期待に応えるために本校において尽力したいと考えている。

大学院連合教職実践研究科教授 片山 紀子

初めまして。生徒指導力高度化コースの片山です。自分がこれまで学んできたことをフィールドワークの中で確認したり、新たに発見する毎日で、慌ただしく過ぎていきます。多くの方とお話ができればと思いますので、どうぞよろしくをお願いします。



大学院連合教職実践研究科教授 小島 弘道

龍谷大学文学部に所属し連合教職実践研究科で学校経営分野の授業をしています。

今年から発足した、教員養成に特化した専門職大学院なので、とまどいもありましたが、次第に慣れてきまし

た。教員養成大学で有数の京都教育大学で仕事をできる幸せと誇りを感じているところです。本学連合教職大学院を我が国で名実ともにトップの大学院にすべく、試行錯誤しながら努力しています。ご支援お願いいたします。

大学院連合教職実践研究科准教授 和泉 真澄

カナダ史・アメリカ史の文脈から、マイノリティの文化活動の政治的意義を考察しています。具体的には、北米日系人たちが人種差別や偏見を乗り越え、独自の文化やコミュニティを形成していった過程を、フィールドワー

クを通じて研究しています。多文化社会は問題も多いですが、世界中の文化を間近に体験できる豊かな環境です。今後の日本の子どもたちをグローバル・シティズンに育てられる先生を作り出す一助となればと思います。

大学院連合教職実践研究科准教授 森田 真樹

4月1日から、連合教職実践研究科でお世話になることになりました。京都教育大学をはじめ、連合を構成する私立大学、京都府・京都市教育委員会から集合した多様な先生方と一緒に、熱意ある院生の教育に携わるこ

とができることに感謝する毎日です。連合教職実践研究科が、他の教職大学院をリードしながら、日本の教員養成の世界に確固たる地位を築くことができるよう、日々努力してまいりたいと思っております。

大学院連合教職実践研究科准教授 池上 祐 司

京都市教育委員会から派遣されて参りました。一昨年までは、京都市立中学校の数学の教諭、教頭として学校現場におりました。昨年は、京都市教育委員会指導主事として「教員の資質向上・地域ぐるみの学校づくりの支援」の業務に携わっていました。実務経験を生かして、現代的な教育課題に対応できる授業力・生徒指導力を持つ教員育成に努めています。また、教育格差の問題に踏

み込むことができればいいなとも思っています。



大学院連合教職実践研究科准教授 山本 雅 哉

これまで京都府内特別支援学校、小学校教員として実務経験を重ねた後、京都府総合教育センターにおいて児童生徒及び保護者との教育相談、教職員対象の教育相談及び初任者研修講座を担当してきました。その経験を生

かして院生が教員として必要とされる実践的な指導力の向上が図れるような授業をしていきたいと思っています。

大学院連合教職実践研究科准教授 阪 梨 學

近年は社会の急激な変化に伴い、教育課題も複雑化・多様化しています。このような課題に的確に対応するため、教職大学院においては理論と実践の融合による高度な実践的指導力を持ち、意欲あふれる教員の養成・育成

が期待されています。全国初であり、新しいことへの「挑戦」が続きますが、校長や教育委員会勤務の経験を生かし熱心に学修に励む院生を支援し、期待される力が身につくよう微力を尽くしたいと思います。

大学院連合教職実践研究科准教授 藤 村 法 子

38年の教職経験を活かすことができるならと4月から着任しました。今現場で本当に求められている教職理論と確かな実践力を融合させた先生を輩出するべく微力ながら頑張りたいと思っています。意欲溢れる63名の院

生と学校現場へフィールドワークに出かけたり、講座で熱い議論を闘わしたり、充実した日々を過ごしています。教師指導を核に教育評価・学校経営を研究課題にして取り組んでいます。

大学院連合教職実践研究科講師 甲斐謙介

京都府下の小学校現場で30年間勤務してきましたが、大学院連合教職実践科の発足に伴い、京都府教育委員会から実務家教員として派遣され、着任いたしました。現場ではこの3年間、主にインターンシップとして実習に

入る学部生の指導を担当していました。大学院では、研究者教員の方と一緒に担当する講義や教職専門実習の指導で、現場での経験を生かし、実践的指導力の育成に力を注ぎたいと思っています。よろしくお願いします。

大学院連合教職実践研究科講師 安藤昇

教職に関する高度専門的な知識と実践的指導力を統合的に有する教員の養成を目的とする教職大学院が創設され、共通科目である「学級経営の課題と実践」を担当しています。京都市の小学校や教育現場で26年間勤務した

中で、様々な仕事を行ってきましたが、やはり学級担任が一番楽しい思い出として残っています。この担任の素晴らしさを自分の実践してきたことをふり返る中で、院生には伝えていきたいと常に思っています。

大学院連合教職実践研究科講師 澤田清人

「私は教師なんだ」と改めて思う。教頭で四年間、指導主事として一年間、教壇から遠ざかっていた。今、対象は大学院生になったが、教材準備や講義に大きな喜びを感じる。

自分のしてきた実践が、教師をめざす人たちの参考になったり、意欲の喚起に繋がるとすれば、これほど嬉しいことはない。

二十五年ぶりに母校に帰った喜びを抱きつつ、一時間一時間を大切にやっていきたい。



言葉と誠実に向き合うこと

京都府教育庁指導部学校教育課指導主事 **辻村 敬三**
(国語科教育専攻昭和57年度卒業 国語科専修平成9年度修了)

仕事柄、1枚の書類を前にして思い悩むことが多い。正しく過不足なく、しかも無駄な飾りもなく伝えるには、どの言葉をどのように使うべきか、呻吟する日々が続く。たかが1枚の書類と言ってしまうと容易いが、公的な文書では、そこに載せられる内容とその言葉が果たす役割は重い。まして、伝えるべき内容は、府内の学校で学ぶ子どもたちに関わることばかりである。そういう重みと緊張感に押しつぶされそうになったとき、私はいつも「誠実であれ」と己につぶやき、心を立て直すことにしている。

私が専攻していた児童文学の研究では、当然、言葉の一つ一つの意味を探り、噛み砕き、吟味していく作業を積み重ねることが最も基本的な作業である。私はまずそこで、言葉と辛抱強く向かい合うことを学んだ。そして、そういう作業を通してようやく見えてきた自分の考えを言葉にしようとして、今度は、その難

しさに当惑させられた。分析は容易いが、自分自身の言葉を見つけることはなんと難しいことか。思い悩む内、私は、言葉を飾ってみたり、多くの言葉を費やして強引に意を通そうとしてみたりすることも度々であった。そんな私を、位藤先生を始め国文学科の先生方は、授業と言葉に向かう姿勢そのもので何度も戒めてくださった。先生方は、どんな場合でも、一つ一つの言葉を大切に扱い、学生の私たちに向けても実に丁寧に語りかけてくださった。言葉とその向こうにいる人間に誠実に向き合っておられたのである。

言葉を伝えることは難しい。ましてや、言葉を生み出すことは、そう簡単にできることではない。だからこそ、逃げずに向き合い、どんな場合でも誠実に伝えていくことが大事だと思う。私が、学部生、院生として学ばせていただいた数多くのことの中で、この一事が、今でも私を支えてくれている。

『出会い』をたいせつにして

京都市立二の丸北小学校教諭 **川合 美香**
(社会科教育専攻 平成18年度卒業)

私は小学生の頃にすてきな先生とめぐり合えたことで、自分の人生を決めることができました。いつも自分のクラスの子どものことを真剣に考え、熱心に指導をしてくださった担任の先生に憧れ、「小学校の先生になりたい」と強く思うようになりました。今、その夢が叶い、教師として働くことができていることをとても幸せに感じています。

京都教育大学では大切な仲間と出会いました。学科で、サークルで、授業の中で。夢を持ちつつも、厳しい現実を前に逃げ出しそうになったり、本当に自分が教師としてやっていけるのかと不安になったり、何度もくじけそうになりました。しかしその度に、同じ夢を持つ仲間が救われ、励まされてきました。今でも大学時代の仲間と会い、思い出話をしたり、仕事でのつらいことなどを話し合ったりしています。同じような悩みを持っている先輩や同期がいることを知ると、安心して、またがんばろうという気持ちになれます。このような仲間と出会えたことが、京都教育大学で過ご

したことの一番の財産であると、社会に出てから実感しています。

昨年度、初めて自分のクラスを持ち、初めての教員たちと対面したときの緊張感と感動は今でも忘れられません。何も分からないままスタートした私を、子どもたちはやる気とやさしさで支えてくれました。授業が思うように進まないことがあったり、子ども同士のトラブルもあつたりしましたが、そうしたことを乗り越えるたびに、子どもたちも私自身も一緒に成長してきた気がします。運動会や学習発表会などの各行事では、子どもたちと共に汗を流し、1つのものをつくりあげることの達成感や感動を味わうことができました。先生になってよかった、このクラスの子どもたちと出会えてよかったと、心から感じました。

様々な人と出会いがあり、今の私があります。これまでの出会いと、これからの出会い。これらの出会いをたいせつにしながら、教師生活を楽しまたいと思います。

困窮と改革への在学時代

私は太平洋戦争終戦の翌年、昭和21年4月に、京都師範学校男子部に入学し、昭和24年3月に卒業しました。この3年間は衣食住は言うに及ばず、勉学図書用品にも事欠き、困窮に堪え忍んだ時代でした。しかも政治・経済・社会・教育全般にわたっての大混乱期でもありました。

1年は全員共通科目を履修する5クラス編制でしたが、2年から専攻科目別の編制、卒業時は男女共学制で本校7・桃山校6クラスでした。同期には順調な進学者でも半年前までは学徒動員で軍需工場に、陸士・海兵等軍関係校や、助教・他職に従事していた者等々多彩で、10才の年齢幅がありました。

例えば授業でも、長田・乙竹・篠原氏の教育原論の講義を受けながら、欧米の思潮が色濃く入る時代でした。バージニヤ案・カリフォルニヤ案等のカリキュラム論が、教育実習の指導案作成にも関わり、シーケンス・スコープ等の用語が今でも耳の底に残っています。そして新教育の先駆者として情熱に燃えて、母校を巣立っていったことを思い出します。

特筆すべき事は、学制改革（学芸大学昇格）に向けて、私達の願い実現に様々な取り組みをしたことです。中でも大学設置基準の指針だった男女共学を、私達卒業年次に部分的でしたが制度として先取りしたことです。改革への表明と具体的行動の学生大会を開き、議長を勤めたことを覚えています。

図書館充実を私達のイベントを、京都府下一円に展開、募金集めに奔走したこともありました。さらには、校舎内外の清掃整備活動を始業前・放課後に、寮生は永友教官と共に夜明けから朝食まで、何回か奉仕しました。とにかく勉学と共に、母校の大学昇格運動の一翼を担って、身を挺して行動した時代でもありました。

附属校の使命は教育研究と教育実習

私の現役教師は、新任の郷里の公立中学で6年と京都学芸・教育大学附属桃山小学校33年でした。新卒で張り切っていた中学での印象も強いが、長かった附属校勤務が教師としての私を形づくってもらったと思っています。

中学3年から小学校1年担任に急転、9ヶ年の落差は大きく私を困惑させました。授業で話す言葉にも困りましたし、子供の中に入ると躰きそうで気がかりでした。こんな日々が子どもの考えや行動の実態を探る動機となり、アサガオの水やりの持続力、アニミズムの調査等から科学的な見方・考え方育成へのテーマに

つながったように思います。希有にもこの子達を6年まで担任できたこと、附属校の園児・児童・生徒と関わったこと、幼・小・中・高・大学の先生方との合同研究を通して、幅広い交流ができたことも好都合でした。

附属桃山小は、子どもの自主性を重んじる教育を伝統としてきました。生き生きと授業に打ち込む場面に、彼らの想像力が働いていることに着目した私達は、昭和40年以降「想像から創造への指導」テーマで共同研究することになりました。2年毎に成果の発表会。その都度明治図書からの出版も17冊に、12学級の授業に溢れる参会者対応にも悩みました。「附属校の使命は先導的教育研究と教員養成の教育実習だ」と先輩からよく言われました。頑張って仕上げた研究資料を「労作だが研究でない」と酷評されることもありました。

教育実習は年2回で6週間、1回4人担当。「授業は教師の檣舞台」「教育技術を身につけたプロに」私がよく口にした言葉でした。何回も修正を重ねる指導案、発問助言の吟味、板書等は特に重視しました。例えば板書文字の大小・字数、絵図入れ、色チョーク等まで、効果について授業後反省会も持ちました。

実習修了時に、「実習に来て、教師になりたいと真剣に思った」という彼等の言葉に勇気づけられ、「頑張れば私なんかすぐに追い越せる」と檣を飛ばしたものでした。

余生を生きる

70才までは要請に応じて現場に出向くことが度々でした。附属教師なるが故か、現役時代から飛び入りの実演授業や、実験観察実技講習が主でした。

昨年同窓会理事長を退任しましたが、在任中は近頃の母校・同窓会離れの傾向を愁い、母校と同窓会の連携強化や母校愛を、総会や大学卒業式の祝辞の中でも訴え続けました。

現在80才、地元小学校見守り会の一員として、児童の登校時安全の立ち番を続けています。「お早う」の声かけに応じてくれない子もいますが、教師として生きてきた自分にできる一貢献かなと思っています。偶然にも昨年は教頭先生、本年は校長先生が巡回中に、「小谷先生と違いますか」の突然の問いかけに驚きました。教育実習の縁がとりもった30年来の再会でした。後輩先生方のお手伝いにもなっている現実に出会い、一教師としての果てしない道程を味わいつつある昨日です。

（自分記になって恐縮しています）

第 122 号の読者の皆さまへ

KYOKYO をお読みいただきありがとうございました。

より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。

広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522

京都市伏見区深草藤森町 1 番地

京都教育大学企画広報課気付「地域連携・広報委員会」

E-mail : kouhou@kyokyo-u.ac.jp

122 号編集後記

広報 122 号をお届けいたします。特集は「附属特別支援教育臨床実践センターの紹介」です。2007 年に誕生した京都教育大学附属特別支援教育臨床実践センターの活動や文部科学省採択の G P プロジェクトについてご紹介しています。特別支援教育における教育現場の今日的ニーズに応えるためには、教育委員会や地域の学校、医療・福祉施設との密接な連携が不可欠ですので、何卒みなさまのご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

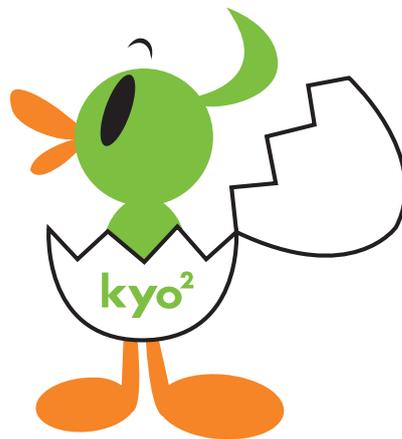
なお、本号の表紙を飾るのは附属桃山小学校の岡本和貴さんの作品です。画面からあふれ出すような夢と色彩をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長 武蔵野 寛



地域連携・広報委員会

委員長	武蔵野 寛				
副委員長	村田 利裕				
委員	広木 正紀	田中 里志	浅井 和行	樋口 とみ子	
	村上 忠幸	荻野 雄	榊原 禎宏	宇野 和樹	
事務担当	企画広報課				



京都教育大学広報 第122号

発行日
2008年10月31日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
<http://www.kyokyo-u.ac.jp>